

説教：「疑念と信頼」

聖書：ヨブ記2：1～13

ヨブ記の中で、人間は「利益もないのに神を敬う」ことができるのか？という問いがある。私たちの信仰が揺さぶられる。サタンは人間の弱みを知っている。「利益もないのに神を敬うでしょうか」と迫ってくる。そしてヨブの財産にサタンが「触れる」ことを神に願い、神は承諾する。財産を、命を奪えば、神に対し面と向って呪うに違いないとサタンは言う。しかしヨブは、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ」と祈った。サタンのもくろみは破られる。御利益信仰と思っていたのにそうではなかった。ヨブは、全ての財産を失っても、愛する息子、息女を亡くしても、神を呪うということはしなかった。信仰とは、「神の言葉に生きて、現実の出来事を貫くことである」という。こちらにも言い分はある。注文もある。しかし時に、神の御前にただ沈黙せざるを得ないこともある。

ただヨブは、本当に「神よ、なぜですか？」という疑念は無かったのか？ 少し、イエスの言葉を思い出したい。イエスは十字架上で「父よ、わたしの霊を御手にゆだねます」(ルカ23：46)というが、これはヨブの信仰と同じく、事の次第を神に「ゆだねる」ということである。ただ、十字架上のイエスは、その少し前にこうも言っている。「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と。これは矛盾する。「なぜわたしを見捨てるのか」とは、神への「疑念」がそこにある。またイエスの「御手にゆだねます」という言葉には、神への「信頼」がある。イエスの十字架上では、「疑念と信頼」があった。このことは、私たちが神を信仰する中では慰めになるものではないか。

ヨブ記1、2章の出来事は、ヨブの完璧なまでの信仰を見せ付けられるわけだが、しかしこの後の展開は、3章から試練に耐えかねて苦しみを叫び始めるヨブの姿がある。神への「疑念」が起こる。されど、神の存在を改めて知らされる中で、最後の42章においてヨブは、悔い改め、神にゆだねていく「信頼」が起こされていく。

信仰は、信頼と疑念、疑念と信頼というものが交差しながら、でも最終的には信頼(信仰)を持って神にゆだねて行くことである。それは、私たちが教会に繋がることにおいて、悲しみや苦しみ、喜びや楽しみも、共に共有し、担うことであり、そのことが信仰を貫く結果を迎えるのであろう。(神谷)